

# 古典の日

二十  
親不知



## 奥の細道

松尾芭蕉

けふハ、親しらず子しらず・犬もどり・駒返しなど云北国一の難所を越て、つかれ侍れば、枕引よせて寝たるに、一問隔て、面の方に、若きをんなの声二人計ときこゆ。年寄たるおのこの声も交て、物語するをきけば、越後の国新泻と云所の遊女なりし、伊勢に参宮するとして、此間までおのこの送りて、あすハ古里にかへす文したため、はかなき言伝などしやる也。「白波のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契、日々の業因、いかにつたなし」と物云を聞き、寐入て、あした旅だつに、我くむかひて、「行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覚束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍らん。衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へ」と、なミだを落す。不便の事にハおもひ侍れども、「我くハ、所くにてとままる方おほし。唯人の行にまかせて行べし。神明の加護、必ず、がなかるべし」と云捨て出つ、あはれさしばらくやまざりけらし。

一家に遊女も寐たり萩と月  
曾良にかたれば、書とゞめ侍る。



難所のひとつである親不知の海岸風景(新潟県糸魚川市)

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

## 海辺の宿の萩と月

酒田から越後越中の境の市振までの、日本海沿いの長い十五日の旅は、わずかに三、四行につづめて語られていた。それに対し、この市振の章は、七月十二日(陽暦八月二十六日)の一夜の宿の物語を、たっぷり二十行近くも費して語っている。それも平泉や山寺や月山の章のように漢語とその対句を多用した弦楽四重奏風の文体ではなく、爛々たる木管の一曲を奏でるような和文脈の文体である。

国境の海ぎわの小さな宿場で、旅する若い遊女二人と初秋の月一夜にめぐりあったという。「旅のあはれ」を語る一種の幻想曲だかつてある。襖一枚隔てた隣室から聞こえてくる女二人と見送りの老人の、「白波のよする汀に身をはふらかし」というような古歌を引いての語らひの合間には、ほんとうに海辺の波の音さえ鳴っていたかもしない。「おくのほそ道」の進行とともに生じるこの転調はさすがに自在だ。

那須野を行く章には「かさね」というその名もやさしい女の子が登場した。白河の関の前では田植えする早乙女の声や姿がしのばれ、尾花沢では紅花に都の女の眉掃きを連想したりもした。だが遊女は、仙台でも酒田でも新潟でも見かけたであろうに、芭蕉の文中に登場するのは、この淋しい海辺の宿の章がはじめてである。しかも二人の女は新潟から来て遠く伊勢参りに行くのだという。老人ともこの関で別れ、これからあまりに心細いから、お坊様二人(芭蕉・曾良のあとに「見えがくれにも」つきそわせてくれという。芭蕉は理由をあげてその願いを断つたが、さすがにあれで「一家に遊女も寝たり」の句を作った。あまりにうまく虚構された夢幻劇だとの説がある。新潟の遊女はもととくまじい女たちのはずで、ここには遊女とは哀れなものも芭蕉の思いこみがあるのではないかと、この説もある。だがそれでも昭和の中野重治でさえ「旅の心はひええとしめりをおびて来る」と詠んだ白浪の「親しらず市振の海岸にふさわしい、美しくもあわれな抒情小曲の名品であることにかわりはない。

芳賀徹さんとたずねる  
おくのほそ道



## ビジネスにいかしたい

源氏物語などの古典文学が、生きていく上で大切な社会動静や人間関係を語っていると認識した

### 古典と私

のは社会人になってからでした。これらの作品が現代とかけ離れた話ではなく、ごく庶民的で人間臭が漂い、共感できる

堀場製作所社長 堀場厚 さん



思うようになったのも自然の流れでした。昔も今も人の愛情や思

な思になるのが不思議です。古典の恋物語や社会風刺もさることながら、ビジネスマンとしては、三国志などの国を治めること、の難しき、マネージメントの大切さを語る古典歴史書のようなものが大変興味深く、読書意欲を掻き立てられます。強さだけでは人を引っ張れない、知識だけでは人を説得できない、人格だ



松原通に面する珍皇寺の門(京都市東山区)

散らせませす。かねてより東国の病母のことを心配していた熊野は、「いかにせん都の春も惜しけれど 馴れし東の花や散るらん」と歌を詠み、宗盛もその気持ちを察して熊野に暇を与え、熊野はそのまま東国へ帰ります。

ちなみに、烏丸通から松原橋までの松原通界わいには、「夕顔」「鐵輪」「半部」「融」「橋弁慶」「頼政」など謡曲に関わる所がたくさんあり、清水寺には「熊野」の他に、東国から京に来た僧が坂上田村麻呂に会う「田村」などがあります。(NPO法人・都草 木村 哲夫)

## 謡曲「熊野」の道を往く

### 文学ウォーク

世阿彌元清作の謡曲「熊野」には、平清盛の三男宗盛が愛妾の熊野を伴って桜を見に清水寺(京都市東山区)へ行くまでの「道行」が描かれています。

五条橋(現在の松原橋)を東へ、鴨川を渡り六波羅を過ぎると、「愛宕の寺もうち過ぎぬ、六道の辻とかや、げに恐ろしやこの道は、冥土に通ふなるものを」とあり、600年前に述べられた場所は現在でも存在しています。「愛宕の寺」とは、六道珍皇寺のことで、ここに残る井戸は平安時代の官人小野篁が冥土へ通う時の入り口に使ったと言われます。

やがて桜が満開の清水寺で酒宴がはじまります。熊野は宗盛の要望に応じて舞いますが、途中で村雨が降り出して花を

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

# 親しむ

# Kinden

## チーム、きんでん。

(施工力+技術力+現場力)×情熱

“お客さま満足”という目標に向かって、さまざまなスタッフが力を結集。人間力を基盤とした総合エンジニアリング力で、あらゆるソリューションにお応えします。



エネルギー 環境 情報  
電気 計測 衛生  
情報通信 空調 土木

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 東京本社 東京都千代田区九段南2丁目1番21号  
TEL.06-6375-6000 TEL.03-5210-7272  
http://www.kinden.co.jp/

# きんでん